

大学の教育方針

目次

- I 建学の精神と理念
- II 教育目的
- III 使命・目的
- IV 沿革
- V アドミッション・ポリシー

- ◆ 声楽専攻
 - ・ 声楽
 - ・ 声楽演奏家コース
- ◆ 器楽専攻
 - ・ ピアノ
 - ・ ピアノ演奏家コース
 - ・ ピアノ演奏家コース・エクセレンス
 - ・ ピアノ・創作コース
 - ・ コンポーザー＝ピアニストコース
 - ・ チェンバロ
 - ・ オルガン
 - ・ 弦楽器
 - ・ 管打楽器
- 作曲指揮専攻
 - ・ 指揮
 - ・ 作曲「芸術音楽コース」
 - ・ 作曲「映画放送音楽コース」
 - ・ 作曲「ポピュラー・インストゥルメンツコース」
 - ・ 作曲「ソングライティングコース」
- 音楽教育専攻
 - ・ 応用音楽教育コース
 - ・ 実技専修コース

VI カリキュラム・ポリシー

- 1 専攻科目
 - ◆ 声楽専攻
 - ・ 声楽
 - ・ 声楽演奏家コース
 - ◆ 器楽専攻
 - ・ ピアノ
 - ・ ピアノ演奏家コース
 - ・ ピアノ演奏家コース・エクセレンス
 - ・ ピアノ・創作コース
 - ・ コンポーザー＝ピアニストコース
 - ・ チェンバロ
 - ・ オルガン
 - ・ 弦楽器
 - ・ 管打楽器
 - ◆ 作曲指揮専攻
 - ・ 指揮
 - ・ 作曲「芸術音楽コース」
 - ・ 作曲「映画放送音楽コース」
 - ・ 作曲「ポピュラー・インストゥルメンツコース」
 - ・ 作曲「ソングライティングコース」
 - ◆ 音楽教育専攻
 - ・ 応用音楽教育コース
 - ・ 実技専修コース
- 2 専門基礎科目
 - ・ 音楽学関連科目
 - ・ ソルフェージュ科目
 - ・ 音楽理論関連科目
- 3 専門共通科目
- 4 基礎教育科目
 - ・ 外国語科目
 - ・ 教養科目

VII ディプロマ・ポリシー

- ◆ 声楽専攻
 - ・ 声楽
 - ・ 声楽演奏家コース
- ◆ 器楽専攻
 - ・ ピアノ
 - ・ ピアノ演奏家コース
 - ・ ピアノ演奏家コース・エクセレンス
 - ・ ピアノ・創作コース
 - ・ コンポーザー＝ピアニストコース
 - ・ チェンバロ
 - ・ オルガン
 - ・ 弦楽器
 - ・ 管打楽器
- ◆ 作曲指揮専攻
 - ・ 指揮
 - ・ 作曲「芸術音楽コース」
 - ・ 作曲「映画放送音楽コース」
 - ・ 作曲「ポピュラー・インストゥルメンツコース」
 - ・ 作曲「ソングライティングコース」
- ◆ 音楽教育専攻
 - ・ 応用音楽教育コース
 - ・ 実技専修コース

I 建学の精神と理念

- ・アカデミズムと実学の両立
- ・音楽による社会貢献
- ・国際性

東京音楽大学は、鈴木米次郎により明治40年(1907年)に設立された東洋音楽学校を前身とする、我が国で最も古いルーツを持つ私立音楽大学です。昭和38年(1963年)に4年制大学として認可され、続いて昭和44年(1969年)に東京音楽大学と名称変更し、平成5年(1993年)に大学院音楽研究科修士課程を設置し、現在に至っています。

創立者、鈴木米次郎は常々「音楽を通して社会に貢献する」と語り、私立学校設立認可願にも「汎ク音楽ニ関スル学科及術科ヲ教授シ以テ高潔ナル品性ノ修養ヲ得セシムルニアリ」と記されています。鈴木は、西洋音楽に関する学問の探求と高度な音楽技量の修得を通じて教養豊かな音楽家及び音楽教育者を育成し、それによって社会に貢献することを願っていました。

この建学の精神は「アカデミズムと実学の両立」「音楽による社会貢献」「国際性」として、創立当初より、修業年限を東京音楽学校(現・東京藝術大学)と同じ3年(他の私立音楽学校は1～2年)とすること、視覚障がい者のための点字楽譜を開発すること、清国留学生を積極的に受け入れること(これら留学生は中国における西洋音楽教育普及に尽力しました。)、卒業生を「船の楽士」として太平洋航路の客船に乗船させること等の実践活動を通じて実現されてきました。

この精神は本学における教育の基本理念として現在の学則にも反映されており、社会の第一線で活躍する教師陣等による我が国でも最高レベルの教育水準を保つことにより、国内外の著名なコンクールやオーディションなどの入賞者、入選者を例年多数輩出し、音楽界、教育界、さらに近年では音楽産業分野にも優秀な人材を送り出すに至っています。

II 教育目的

学則では、本学の教育目的を次のように謳っています。

「本学は、教育基本法に則り、広く一般教育の知識を授けるとともに、音楽の専門教育を行い、これを通じて人格の完成をはかり、もって有為な音楽家を育成することを目的とする。」(学則第2条)

「本学は、音楽芸術の研鑽を通じて、高度な専門性を有した音楽家、音楽教育者を育成する。また、自らの音楽的個性とともに幅広い教養を備え、現代社会の様々な局面に対応しうる人材を育成することを教育目標とする。」(学則第2条の2)

Ⅲ 使命・目的

東京音楽大学では互いに関連しあう6つの使命・目的を定めています。

1) 教育

音楽の高度な専門教育を実施することによって、実力ある音楽家、音楽教育者、音楽研究者を始めとし、広く音楽界に貢献する人材の育成を第一の目的とします。専門教育だけではなく一般科目との連携によって、個の確立、協調性と社会性の獲得を目指し、「アカデミズムと実学の両立」の精神による、現代社会に通用する人間の育成を目指します。

2) 演奏

学生に多くの演奏の機会を与えるとともに、それによって多くの人々に、演奏に親しむ機会を提供します。演奏活動を通して学生の演奏能力の向上を図り、同時に自立する力や社会性を育てます。また、演奏会の企画、運営などを学ぶ場も設定し、音楽を社会に提供する姿勢を育んでいます。

3) 国際性

ヨーロッパやアジアの様々な大学と提携し、学生の派遣、演奏家や教育者の招聘によって、国際的な視野を持つ人間を育てることに努めます。学生オーケストラ、吹奏楽団の海外演奏会も行います。

4) 研究

教員自ら修練を重ね、優れた音楽を演奏し、社会に提供することに努めます。実践的な音楽演奏に留まらず、演奏法や指導法の開発、新しい音楽の創造、その基盤となる音楽研究、それらを支える様々な研究領域についても研鑽を積みみます。また、卒業後も研究を望む学生のために大学院を設置しています。

5) 多様な音楽的価値観の尊重

西洋の伝統的な音楽だけでなく、日本、アジアを始めとする様々な音楽的価値への多角的な視点を獲得する機会を提供します。ジャズ、ポピュラー音楽などについても講座や専攻を開設することによって、より広い視野や多面的な能力を持つ音楽人の育成に努めます。

6) 地域連携

地域の自治体や様々な学校との連携を促進します。学内で開かれるコンサートは地域に広く公開し、公開講座などを通じて地域とのつながりを大切にします。

IV 沿革

- 1907 明治 40 年 5 月
鈴木米次郎、東京市神田区に本学の前身となる東洋音楽学校を創立
現存する私立音楽大学の中で最も古い伝統を有する。
本科と別科があり、ピアノ、オルガン、バイオリン、独唱、作曲を教えた。
- 1908 明治 41 年 9 月
管弦楽部設置
- 1910 明治 43 年 3 月
東京フィルハーモニー会設立 事務所を本校に設置し、音楽普及に努めた。
卒業生中心の東京オーケストラ団を結成し、積極的に演奏会を開いた。
- 1912 大正元年 8 月
東洋汽船会社の地洋丸などアメリカ航路の客船に本校卒業生による楽団が乗船し、
演奏を開始。この活動は、編成を拡大しながら 20 年近くにわたって続けられた。
- 1916 大正 5 年 1 月
日本の音楽教育機関として初めて雅楽科を開設
- 1923 大正 12 年 9 月
関東大震災のため校舎全焼
当時池袋にあった成蹊学園(現成蹊大学)の一部を借り、授業再開
- 1924 大正 13 年 11 月
北豊島郡高田町大字雑司ヶ谷(現豊島区南池袋)に校舎移転
- 1926 昭和元年 4 月
師範科設置
- 1930 昭和 5 年 11 月
演奏旅行(秋田、新潟、長野、松本、豊橋、名古屋、四日市)
現在の B 館敷地に鉄筋 2 階建ての新校舎竣工
- 1937 昭和 12 年 4 月
グルック作曲: 歌劇《アウリスのイフィゲニア》を本邦初演(日比谷公会堂)、オーケストラは新交響楽団(現NHK交響楽団)NHK により全国に中継放送

- 1940 昭和 15 年 6 月
ウェーバー作曲: 歌劇《魔弾の射手》を本邦初演(日比谷公会堂)、オーケストラは中央交響楽団(現東京フィルハーモニー交響楽団)
- 1945 昭和 20 年 4 月
空襲により校舎焼失。終戦後、残った鉄筋校舎で授業再開
- 1954 昭和 29 年 2 月
東洋音楽短期大学設置認可(声楽専攻、器楽専攻、作曲専攻)
- 1960 昭和 35 年 9 月
A 館(旧)竣工
- 1963 昭和 38 年 2 月
東洋音楽短期大学から4年制の東洋音楽大学に移行(声楽専攻、器楽専攻、作曲指揮専攻、音楽教育専攻) 短期大学学生募集停止(昭和 45 年 3 月廃止)
- 1965 昭和 40 年 6 月
A 館(旧)施設拡張(ホール、研究室、学生食堂、会議室を増設)
- 1969 昭和 44 年 4 月
B 館竣工(11 階建、レッスン室、教室、スタジオ)
8 月
東洋音楽大学から東京音楽大学に名称変更
- 1970 昭和 45 年 4 月
目白台学生寮竣工
- 1971 昭和 46 年 4 月
声楽専攻にオペラコース新設(平成 13 年まで)
- 1973 昭和 48 年 5 月
附属図書館竣工
- 1975 昭和 50 年 7 月
東京音楽学校(旧東洋音楽学校)廃止
9 月
附属民族音楽研究所開設

- 1976 昭和 51 年 4 月
器楽専攻にピアノ演奏家コース新設
- 1978 昭和 53 年 3 月
創立 70 周年記念アメリカ親善演奏旅行(ロサンゼルス、テンピ[°]、コバリス、サクラメント) 指揮:森 正
- 1979 昭和 54 年 11 月
中国親善演奏旅行(北京、杭州、上海) 指揮:森 正
- 1981 昭和 56 年 11 月
オーケストラ ドイツ演奏旅行(カール・マルクス・シュタット、ゲーラ、ベルリン、ボン)
指揮:森 正
- 1984 昭和 59 年 11 月
オーケストラ ドイツ演奏旅行(シュタスフルト、ベルリン、ライプツィヒ、ドレスデン、イエナ、ワイマール、ホイエルスヴェルダ) 指揮:オラフ・コッホ
- 1989 平成元年 4 月
作曲指揮専攻に映画・放送音楽コース新設
声楽専攻に声楽演奏家コース新設
- 1991 平成 3 年 1 月
邦楽研究室棟使用開始
- 1993 平成 5 年 3 月
大学院音楽研究科修士課程設置認可(器楽専攻、声楽専攻、作曲指揮専攻、音楽教育専攻)
11 月
オーケストラ アメリカ演奏旅行(シカゴ、ニューヨーク、ワシントン)指揮:広上 淳一
- 1994 平成 6 年 3 月
J 館竣工(スタジオ、レコーディングルーム、教室、レッスン室)
- 1998 平成 10 年 6 月
合唱団 オランダ演奏旅行(ユトレヒト、アムステルダム)、ネザーランド・フィルハーモニー管弦楽団と共演 指揮:小林 研一郎

- 2000 平成 12 年 10 月
室内楽 ドイツ・オーストリア演奏旅行(ハノーファー、ベルリン、ケルン、ザルツブルク) ハノーファー万国博覧会イベント「世界の音楽大学が集う」からの招待
- 2004 平成 16 年 9 月
K 館(法人事務室・会議室・研究室) 使用開始
- 2005 平成 17 年 4 月
作曲指揮専攻にポピュラー・インストゥルメンツコース新設
- 2007 平成 19 年 3 月
創立 100 周年記念本館校舎(A 館) 竣工
4 月
音楽教育専攻改編(応用音楽教育コース・実技専修コース)
- 2009 平成 21 年 3 月
オーケストラ ヨーロッパ演奏旅行(ミュンヘン、プラハ、バンベルク、ウィーン)
指揮: 広上 淳一
- 2011 平成 23 年 4 月
器楽専攻にピアノ演奏家コース・エクセレンス新設
10 月
シンフォニックウインドアンサンブル 台湾演奏旅行(台北、台中、高雄)
指揮: 汐澤 安彦
- 2012 平成 24 年 3 月
オーケストラ ヨーロッパ演奏旅行(テプリツェ、プラハ、ブダペスト、グラーツ)
指揮: 小林 研一郎
4 月
作曲指揮専攻にソングライティングコース新設

V アドミッション・ポリシー

東京音楽大学では、入学者が本学において実りある学びを円滑に行えるように、アドミッション・ポリシー(入学者受入方針)を定めています。これは、本学を受験する皆さんに、入学前に身に付けておいていただきたい能力や姿勢を示す基本方針です。本学の入学試験や選抜方法には、アドミッション・ポリシーが反映されています。

- 大学において専門的に音楽を学ぶにあたり、楽譜を読む力、音を聴く力、表現の基礎となるテクニック、様式を捉える力、楽典の知識が、一定のレベルに達していることが重要です。
- 音楽の学習には外国語も必要です。
- 専攻によっては、ピアノ演奏や新曲視唱、新曲視奏の基礎的な能力も必要です。

各専攻のアドミッション・ポリシーは次の通りです。

声乐専攻

●声乐

音楽～歌～を愛し、演奏家、教育者などを目指して学ぶための資質を有し、熱意を持って努力し続けることのできる人材を求めます。声を楽器として創り上げるために、基礎的な歌唱力、語学力が必要です。また、周囲との協調性や社会性も身に付け、豊かな人間性を育むために、広い視野を持って学ぶ姿勢が望まれます。

●声乐演奏家コース

声乐専攻(声乐)のアドミッション・ポリシーに加えて、国際的にも活躍できる実力を持った音楽家の育成を目指すという観点から、その学習のためのより高い資質、より強い意欲が必要です。

器楽専攻

●ピアノ

ピアノ音楽の学習を通して豊かな人間性、社会性を育むために、ピアノに限定することなく音楽に関して幅広く関心を持ち、外国語を始めとする教養科目にも勉学意欲のある人材を求めます。ピアノ演奏の系統的な学習を円滑に行うために、基礎的なピアノ演奏技術と演奏スタイルを習得していることが必要です。

●ピアノ演奏家コース

プロフェッショナルな音楽家として社会で活動できるよう、ピアノに限定することなく音楽に関して幅広い体験を積み、国内外を問わず活動の場を拡げていく意欲のある人材を求めます。器楽専攻(ピアノ)よりも高度なピアノ演奏能力を目指すために、一定水準以上のピアノ演奏技術と演奏スタイルを習得していることが必要です。

●ピアノ演奏家コース・エクセレンス

価値ある演奏を社会に向けて発信し、国際的に活躍する場を獲得していこうとする意欲、また音楽芸術の発展に寄与しようという姿勢を持つ人材を求めます。ピアノ演奏家コースのアドミッション・ポリシーに加え、すでに一定水準以上のレパートリーを獲得し、演奏実績を有していることが必要です。

●ピアノ・創作コース

ピアノを中心としながら、創作、即興、伴奏付けなど音楽活動を幅広く行う意欲のある人材を求めます。器楽専攻(ピアノ)のアドミッション・ポリシーに加え、自作曲の創作経験が必要です。

●コンポーザー＝ピアニストコース

ピアノと作曲をともに学ぶことによって、高いレベルでのピアノ演奏能力とともに、新しい音楽を創り出す能力を獲得し、それらを生かした音楽活動のあり方を探求していく姿勢を持つ人材を求めます。器楽専攻(ピアノ)のアドミッション・ポリシーに加え、和声学及び作曲の基礎を習得していることが必要です。

●チェンバロ

19世紀音楽とは異なる音楽的価値やそれに応じた解釈力を学ぶことが要請されるため、音楽理論や楽器の構造への関心と歴史的な視野を持って意欲ある学びのできる人材を求めます。基礎的なチェンバロ演奏技術を習得していることが必要です。

●オルガン

オルガン奏法を多面的に学ぶために、演奏だけではなく、楽器の構造や歴史、音楽理論なども積極的に学ぶ意欲のある人材を求めます。基礎的なオルガン演奏技術を習得していることが必要です。

●弦楽器

弦楽器独特の美しく豊かな響きを追求し、様々な音楽分野での活躍を希望する人を求めます。各楽器において、基礎的な演奏技術と表現力を有していることが必要です。

●管打楽器

管楽器と打楽器において、高度な技術と豊かな表現力の獲得を目指し、様々な音楽分野での活躍を希望する人を求めます。各楽器において、基礎的な演奏技術と表現力を有していることが必要です。

作曲指揮専攻

●指揮

指揮者としての将来像を明確に描き、リーダーとして活躍できるように努力する覚悟を持っている人材を求めます。そのために、高いレベルの音楽基礎能力と、コミュニケーション能力が必要です。

●作曲「芸術音楽コース」

様々な芸術に対して興味を持ち、将来的に個性ある発信ができる人材を求めます。和声学の知識、及び楽曲制作のための技術と様式感を備えていることが必要です。

●作曲「映画・放送音楽コース」

ポピュラー音楽を始め様々なジャンルの音楽について興味を持ち、かつ音楽に打ち込む真剣な姿勢や熱意を備えている人材を求めます。コードネームの理解と伴奏付けの能力、基本的な和声の知識を持ち、自作曲のデモ演奏または基本的なデモテープ制作ができることが必要です。

●作曲「ポピュラー・インストゥルメンツコース」

楽器演奏のみでなく、作編曲やレコーディング、音楽制作全般に興味を持ち、かつ音楽に打ち込む真摯な姿勢や熱意を備えている人材を求めます。基本的なソロ・アドリブの演奏能力を備え、ポピュラー音楽全般に対する興味を日頃から持っていることが必要です。

●作曲「ソングライティングコース」

実践に根差した楽曲作りに興味を持ち、ゼロから音楽を生み出すことの喜びを感じることができる、意欲の高い人材を求めます。ソングライターとして自己を表現するために、日々様々な音楽に触れ、歌や楽器、文章などでアピールできる下地を身に付けていることが必要です。

音楽教育専攻

●応用音楽教育コース

音楽と人間との関わりや、音楽文化への興味があり、将来は音楽を通して社会に貢献したいという意欲を持つ人材を求めます。論理的思考力や豊かな発想力が必要であり、さら

に高校までの教科全般の勉強から習得した基礎学力と、自分の意見や考えを言葉で表現する能力が必要です。

● 実技専修コース

指導者などを目指し、演奏実技の学習に加えて、幅広い教養を身に付ける意欲のある人材を求めます。基礎的な演奏技術を有し、高校までの全般的な基礎学力を習得していることが必要です。

VI カリキュラム・ポリシー

個人レッスンを核とする**専攻科目**を中心に、**専門基礎科目**・**専門共通科目**で音楽的能力の基礎を固めるとともにその幅を拡げ、さらに、**基礎教育科目**で国際人としての広い教養を身に付けることにより、音楽を土台として現代社会の様々な局面に対応しうる人材を育成することを目標とします。

1. **専攻科目**： 質の高い専門教育を実施し、高度な能力を持つ音楽人を養成します。その実現にあたっては、全専攻での一流の教員による個人レッスンとともに、多くの専攻でアンサンブル教育の充実に力を入れています。
2. **専門基礎科目**： 音楽を専門的に学ぶための基礎を固めます。
3. **専門共通科目**： 専攻の枠を超えた音楽的素養を身に付け、その幅を拡げます。
4. **基礎教育科目**： 音楽家として、社会人としての豊かな教養を培います。

これらに加え、学生の興味・関心に合わせて、資格科目・自由科目などの多彩なプログラムも提供しています。また、成績優秀者には、大学が主催する各種演奏会への出演の機会が与えられます。さらに、海外の大学等と交流協定を結んでおり、選抜された学生には短期留学の機会が与えられます。

各科目のカリキュラム・ポリシーは次の通りです。

1. 専攻科目

声楽専攻

●声楽

カリキュラムの目的：

- ・世界でたった1つの自分の声を「楽器」として育てあげるために、基礎的な発声法などを学びます。
- ・数々の作品を手掛けることで、高い音楽性や表現力を養います。
- ・他者と協調して1つの目標に向かう経験を通じて、社会性も身に付けながら、豊かな人間性を育みます。

上記を通して、様々な音楽分野で活躍できる人材の育成を目指します。

カリキュラムの構成：

- ・週1回の個人レッスンでは、より良い発声と発音を核とする基礎的な専門技術と知識を体系的に修得します。また楽曲の内容を深く理解し表現できるよう、一人ひとりの個性を尊重しながら才能を伸ばす指導が行われています。
- ・2、3年次には日本歌曲を演奏する場が設けられています。

- ・3、4年次では選択科目に「オペラ実習」「歌曲・重唱」の授業が用意され、学生各自の声の特質と特性に合わせた選択ができるように配慮されています。
- ・合唱は4年間必修で、個人では得られないアンサンブル能力や協調性を身に付けます。学外のオーケストラとの共演では、より大きな編成の演奏も体験します。
- ・国内外招聘音楽家等の公開レッスンや個人レッスン、公開講座等の実施により多角的に学ぶ機会も準備されています。
- ・外国語科目は声楽を学ぶ上で重要であり、他専攻よりも多く履修することが必要です。また、その国の文化についての理解を深めるための特別授業も編成されています。
- ・定期実技試験の成績とオーディションにより、希望者には声楽演奏家コースへの転籍制度も設けられています。

●声楽演奏家コース

カリキュラムの目的:

- ・声楽専攻(声楽)のカリキュラムを基礎として、国際的にも活躍できる実力を持った音楽家の育成を目指します。

カリキュラムの構成:

- ・週2回の個人レッスン(2人の教員が担当する場合もある)を通して、より高度な技術と豊かな表現力を身に付けます。
- ・「舞台基礎演技法(オペラ)」では、声楽家、指揮者、演出家などが参加する経験豊かな指導陣によって、実践的な授業が展開されます。その研究成果を発表する場が設けられている他、身体表現、バレエ、ディクシオン(発音指導)なども学ぶ機会があります。
- ・「舞台基礎演技法(歌曲)」では、イタリア、ドイツ、フランス、スペイン、ロシア歌曲を専門的に学ぶことができます。
- ・定期実技試験で基準点に達しなかった場合は、声楽専攻(声楽)へ転籍となります。

器楽専攻

●ピアノ

カリキュラムの目的:

- ・ピアノ音楽を通して、豊かな人間性を育み、高い音楽芸術の創造を目指します。
- ・ピアノ音楽の正統的な解釈と奏法を修得するとともに、アンサンブルを通して音楽的な視野を広げ、社会性も身に付けながら、将来の音楽活動における基盤を学んでいきます。
- ・数々の作品を手がけることで、高い音楽性や表現力を養います。
- ・以上を通して、様々な音楽分野で活躍できる人材の育成を目指します。

カリキュラムの構成:

- ・週1回の個人レッスンでは、一人ひとりの学生の資質や感性に合った指導を行い、基礎濃度を高めるとともに、各人の資質を最大限に伸ばします。各人に適した奏法を身に付けるとともに、歴史的段階を追って楽曲への理解を深め、各時代様式に沿った楽曲の解釈力

を養います。

- ・定期実技試験では、原則として1年次は古典派、2年次はロマン派、3年次はロマン派または近現代、4年次は各自の自由な選曲によるプログラムを演奏します。
- ・ピアノ以外にも室内楽、アンサンブル、伴奏等によって、より豊かな音楽経験を積むことができます。
- ・「ピアノ指導法」「初見法」などの授業、国内外招聘音楽家による公開レッスンや公開講座を通して、ピアノの演奏と教育法の両面にわたって多角的に学ぶ機会も準備されています。
- ・定期実技試験の成績とオーディションにより、希望者にはピアノ演奏家コースへの転籍制度も設けられています。

●ピアノ演奏家コース

カリキュラムの目的:

- ・器楽専攻(ピアノ)のカリキュラムを基礎として、演奏家として自立できるように実践的な舞台経験を積み、最終的に高度なピアノ演奏能力を身に付けることを目標としています。

カリキュラムの構成:

- ・実技能力の向上と充実を図るために、2人の教員によるダブルレッスン制を設けています。
- ・「ピアノ指導法」「初見法」「室内楽」「音楽形式」などの授業、国内外招聘音楽家による公開レッスンや公開講座を通して、演奏家となるためのより広い視野の音楽観や人間性を養います。講師はピアニストだけでなく、様々なジャンルの音楽家が担当します。
- ・成績優秀者は海外招聘音楽家による個人レッスンを受ける機会があります。
- ・定期実技試験は、学内ホールにおいて20～30分程度の公開演奏を行います。原則的に自由なプログラムにより、協奏曲(ピアノ伴奏)も含まれます。
- ・定期実技試験の成績優秀者は、学外のホールにおける定期演奏会に出演することができます。
- ・定期実技試験の成績が基準点に達しなかった場合は、器楽専攻(ピアノ)へ転籍となります。

●ピアノ演奏家コース・エクセレンス

- ・ピアノ演奏家コースの中でも、特に才能があり、卓越した演奏能力を有する学生は、ピアノ演奏家コース・エクセレンスとして大学で支援していきます。
- ・特別奨学金が授与され、担当教員以外の教員からも自由にレッスンを受けることができます。原則としてレッスンは90分で行い、定期実技試験は自由なプログラムによる60分の演奏が課されます。

●ピアノ・創作コース

カリキュラムの目的:

- ・ピアノ演奏を主体としながら、楽曲創作についても基礎から体系的に学び、ピアノ・ソロに

加えて伴奏づけ、編曲などができ、演奏や教育の様々場面に適応できる人材の育成を目指します。

カリキュラムの構成：

- ・器楽専攻(ピアノ)のカリキュラム・ポリシーに準じた上で、ピアノ実技に加え、作曲理論(和声、楽器法など)についても基礎から学ぶことを原則とします。作曲理論については個人レッスンを主体とします。
- ・入学後に専門をピアノに絞りたい場合は、選考試験を経て器楽専攻(ピアノ)あるいはピアノ演奏家コースに転籍ができます。また、作曲をさらに本格的に学びたい場合には、選考試験を経てコンポーザー＝ピアニストコースに転籍ができます。

●コンポーザー＝ピアニストコース

カリキュラムの目的：

- ・ピアノと作曲実技の双方を専攻科目として学び、ピアノ、作曲、室内楽や伴奏など広い分野で活躍できる人材の育成を目指します。

カリキュラムの構成：

- ・器楽専攻(ピアノ)のカリキュラム・ポリシーに準じた上で、作曲(和声、対位法などを含む)なども専攻科目として学び、オーケストレーションができるところまでを目指します。
入学後に専門をピアノあるいは作曲に絞りたい場合は、選考試験を経て、器楽専攻(ピアノ)あるいはピアノ演奏家コースに転籍、または、作曲指揮専攻(作曲「芸術音楽コース」)に転専攻することができます。

●チェンバロ

カリキュラムの目的：

- ・チェンバロの正統的な演奏法を身に付け、ソロのみならず合奏などにも活躍できる人材の育成を目指します。

カリキュラムの構成：

- ・現代のピアノとは異なる古典的な奏法や通奏低音などを修得し、後期ルネサンスからバロックに至るチェンバロのレパートリーを学びます。
- ・時代的、地域的にそれぞれの特徴を持つチェンバロ・レパートリーと、その演奏解釈を学びます。

●オルガン

カリキュラムの目的：

- ・オルガン奏法を基礎から学ぶとともに、楽器の歴史や構造などについても知識を身に付け、オルガン演奏を多面的に学ぶことを目指します。

カリキュラムの構成：

- ・バッハを主たる教材としてオルガン奏法の基礎を学ぶことから始め、ロマン派、近現代作品まで順次レパートリーを広げていきます。

- ・ペダルやレジストレーションを含むオルガン奏法、通奏低音などを修得します。

●弦楽器

カリキュラムの目的:

- ・弦楽器独特の美しく豊かな響きを追求します。
- ・それぞれの感性と知識によって、楽曲の様式や作曲者の意図をとらえ、どのように表現するかを探求します。
- ・合奏等の授業において、「聴(みみ)」を育て、他と協調し、連帯感を培います。
- ・以上を通して、様々な音楽分野で活躍できる人材の育成を目指します。

カリキュラムの構成:

- ・週 1 回の個人レッスンでは、個々の特性を生かしながら、楽曲理解、演奏技術を体系的に修得します。
- ・各学年においては、中間試験で基礎的技術を、定期実技試験で総合的な達成度を見ます。
- ・「管弦楽または合奏(オーケストラ)」と「室内楽」では、1、2年次は必修としてアンサンブルの基礎を修得し、3、4年次は選択として個々の目標に応じた履修が可能です。
- ・特に弦楽器室内楽を学びたい学生のために「弦楽アンサンブル」が開講されており、よりレベルの高い室内楽を学ぶことができます。
- ・国内外招聘音楽家による公開レッスン、公開講座等を数多く実施し、多面的に学ぶことができます。

●管打楽器

カリキュラムの目的:

- ・10 種類の管楽器と打楽器において、高度な技術と豊かな表現力を獲得し、国際的に活躍できる実力を持った音楽家の育成を目指します。
- ・独奏能力だけでなく、合奏技術を高めます。
- ・演奏家、指導者に限らず管打楽器関係のあらゆる職種に必要となる、複数の楽器に関する幅広い知識を獲得します。

上記を通して、様々な音楽分野で活躍できる人材の育成を目指します。

カリキュラムの構成:

- ・週 1 回の個人レッスンを通して、高度な技術と豊かな表現力を身に付けます。なお、打楽器は、鍵盤楽器と打楽器一般に分けて2人の教員が担当します。
- ・国内外招聘音楽家の公開レッスンや個人レッスンの実施により、多角的に学ぶ機会も準備されています。
- ・管楽器の特性として合奏技術の習熟が重要であり、「吹奏楽」「管弦楽または合奏」「室内楽」の授業を充実させています。発表の場としての演奏会は職業的実践の場も兼ねています。管打楽器を専攻する全学生は、希望すればこれらの合奏関連授業を受講できます。
- ・管打楽器学生は専攻楽器だけではなく、いわゆる持替楽器としての複数の楽器にも習熟

しなければなりません。これらの持替楽器についても実技レッスンを受けることができ、「吹奏楽」「管弦楽」「室内楽」で実習できます。

- ・「管打指導法」では全管打楽器の幅広い知識修得と実践を行います。専門楽器の深い知識と組み合わせることにより、高い応用力を身に付けます。

作曲指揮専攻

●指揮

カリキュラムの目的:

- ・指揮者として、多くの人々とともにより多彩、より深遠、より豊潤な感動を実現するために、高度の専門知識と技能を持ち、深い教養に裏付けられた人格を磨きます。
- ・技能の巧みさや音響的感動を追い求めるだけではなく、それぞれの作品が人の心に何をもたらすべく書かれたかを理解し、それを実現するための表現力の獲得を目指します。

カリキュラムの構成:

- ・週1回の個人レッスンでは、基礎的な指揮技術と知識を体系的に修得します。
- ・指揮を学ぶすべての学生、教員が参加する合同レッスンでは、学生有志オーケストラの協力を得て、実践的な指揮の体験を積みみます。ここには、指揮の教員に加えて、特別アドバイザーとしてプロフェッショナル・オーケストラの楽員も参加し、多角的な助言を行います。なお、合同レッスンは他専攻の学生にも公開されています。
- ・楽曲内容の深い理解を目的として、音楽理論、楽曲分析、スコアリーディング等の指導が行われます。
- ・指揮活動の基礎として、複数の楽器のレッスンを受けることができます。
- ・6月と12月にはオーケストラ実習(実技試験を含む)を実施します。
上記のカリキュラムによって、多彩な表現力と強い説得力を基盤とした豊富なレパートリーを築いていけるように指導します。

●作曲「芸術音楽コース」

カリキュラムの目的:

- ・古典から現代に至る作曲技法を学びます。
- ・学年毎に様々な編成の楽曲を創作することで、確実な創作能力の向上を図ります。
- ・自作品の演奏体験の機会を持つことで、演奏家との関係を学び、社会性を身に付けながら、将来に向けて豊かな人間性を育みます。
- ・現代の多様なジャンルの音楽に対応できる創作力を育みます。
- ・以上を重点に、作曲家、また音楽を生かして自立できる人材の育成を目指します。

カリキュラムの構成:

- ・週1回の個人レッスンは、学生が担当教員を毎年度自由に選択できるシステムになっています。3、4年次においては、学生の希望により、複数の教員による定期レッスンを受けることができます。

- ・定期レッスンだけでなく、志向する音楽のジャンルにより、他の教員のレッスンも自由に受けることができる環境が整っています。
- ・作曲能力の向上に加えて、より一層の個性の伸長を図るため、日本及びアジアを始めとする世界の諸民族の伝統的な音楽・文化への関心を持ち、創作に関わる様々な分野にも視野を広げるような指導が行われています。
- ・1年次は管弦楽法、対位法を通して古典から近代までの基礎的な作曲能力を獲得し、2年次は管弦楽法により20世紀以降の作曲技法と作品の分析能力を高めます。
- ・3年次にはコンピューター音楽やマルチメディア演習をとおして、テクノロジーを活用した作曲能力を修得できます。また、より幅広いジャンルの作・編曲技術を修得するために吹奏楽法を開講しています。
- ・4年次には総合的な作曲技法(管弦楽、声楽作品を含む)の修得を目指します。
- ・海外招聘音楽家の公開講座により、国際的な視野を得る機会も準備されています。

●作曲「映画・放送音楽コース」

カリキュラムの目的:

- ・商業音楽分野で必要とされる作曲技法、編曲技法を基礎から学びます。
- ・作編曲家として必要な楽器の知識、楽器演奏の技術を修得します。
- ・ソフトウェア、ハードウェア等の各種ツールの理解を目指します。
- ・卒業後、音楽業界で即戦力となるために、スタジオの知識や、プリプロダクション・セルフプロデュース能力を実践的に修得します。
- ・時代の変化への対応力と、時代の変化に左右されない創造力、独自性を持ち、商業音楽のプロとして十分な実力を備えた人材の育成を目指します。

カリキュラムの構成:

- 1 年次においては「毎日作曲をする習慣」を養うため、週に複数回の課題提出によって楽曲制作の基礎力を養います。
 - 2 年次は、指定された構成、編成、曲尺、用途、目的等の条件を満たす楽曲制作能力を養います。
 - 3 年次はビッグバンド、ストリングス等、ポップスにふさわしいオーケストレーション能力を修得し、代表的な編成での作曲法、編曲法を学びます。
 - 4 年次にはスタジオ録音、編集作業を実践的に学びます。
- ・商業音楽作曲家には必須である楽器演奏(アンサンブルを含む)の技術、シンセサイザーやコンピューターなどのツールを使いこなす技術を養います。
 - ・ポップスのみでなく、作編曲家として必要な広い分野の音楽に触れ、音楽現場で即戦力となるための様々な知識、技術を身に付けます。
 - ・「ポピュラー・インストゥルメンツコース」の授業と提携し、多様な演奏スタイルを理解し、修得します。
 - ・外部スタジオ見学など、音楽制作におけるプロの技術に接する機会も設けています。
 - ・卒業制作としてセルフプロデュースによる自作曲のCDを制作します。

●作曲「ポピュラー・インストゥルメンツコース」

カリキュラムの目的:

- ・専攻楽器の演奏技術の修得を中心として、自らの音楽作品を制作する能力も育みます。
- ・音楽制作全般に関与し(プロデューサー)、全体を把握しながら創作活動を行い(プレイヤー、クリエイター)、制作現場においてはリーダーシップをとれる(ディレクター)人材の育成を目指します。
- ・自己の個性を伸長することと同時に、プロ・ミュージシャンとして恥ずかしくない人間性、姿勢、態度、言葉遣いが身に付くように、授業やレッスンで十分な配慮をします。

カリキュラムの構成:

○エレクトリックベース

演奏法の研鑽と、多種多様な奏法及びスタイルの研究、楽器の構造的な特性の研究、認識、体得に重点をおいています。

○エレクトリックギター

演奏法の研鑽と、コード・スケール理論、ジャズ理論、そしてリズムの概念及び音楽スタイルの研究、修得に重点をおいています。

○ドラムス

演奏法の研鑽と、多種多様なリズムの概念及びスタイルの研究と修得、及びドラムスの役割についての研究、認識、体得に重点をおいています。

- ・特徴的なカリキュラムとして、レコーディングスタジオでのアンサンブル等の実習があります。レコーディング機材を駆使し、各楽器の音色、バランス等の学修を行います。
- ・授業には「映画・放送音楽コース」の学生が参加し、議論をすることで、作編曲能力、音楽の内容についての推察力、分析力をともに向上させることができます。また、録音を伴う授業では、プロの録音現場の流れと同じ進行を体験することを通して、録音現場で必要となるプロデュース・ディレクション能力、指導力や協調性などを体得します。
- ・ロック、ジャズ、フュージョン、エレクトリック、アコースティック、ポップス等の、様々な演奏スタイルに対応できる能力を高めます。
- ・卒業制作としてセルフプロデュースによる自作曲のCDを制作します。

●作曲「ソングライティングコース」

カリキュラムの目的:

- ・「作品に心をこめる」ための一歩として言葉(ことのは)を学びます。
- ・「ゼロから生み出すことの喜び」を共に体感し、作品に反映することを目指します。
- ・楽曲を活用する現場から求められる作品作りを、個々の事例に沿ったシミュレーションのもとに行い、現場のニーズを理解し、それらに応えられる能力の獲得を目指します。

カリキュラムの構成:

- ・詩を作るにあたり、自分で考え、書くことを楽しむことから始め、そして書くことに慣れ、壊し、その過程の中からそれぞれの個性を見出していきます。
- ・楽曲制作にあたっては、第三者への楽曲提供を想定し、そのために必要な様々な音楽ス

タイトル、楽曲が使用される環境への理解を促すと同時に、各自のオリジナリティを深めることを目指して、詩、曲の両面から講義とレッスンを展開します。

- 楽曲がどのようなプロセスを経て聴衆に届けられるのかを、楽曲マネジメントの角度から検証します。
- 作家としての能力を高めるために必要な演奏基礎、コード理論、作編曲の知識、また、基礎的な音楽能力の向上のための授業が用意されています。
- 「映画・放送音楽コース」「ポピュラー・インストゥルメンツコース」との授業連携により、より総合的な音楽能力の向上を図ります。
- 卒業制作としてセルフプロデュースによる自作曲のCDを制作します。

音楽教育専攻

●応用音楽教育コース

カリキュラムの目的:

- 音楽教育や音楽文化についての専門的な学修を中心としながら、さらに実技科目をバランスよく学べるのが特色です。
- 社会一般に関する幅広い教養も身に付け、応用力と柔軟性を養います。
- ゼミナールや卒業課題(卒業論文等)作成を通して、柔軟な思考力、文章表現力、調査力、問題解決能力を身に付けます。
上記を通して、学校教員のみならず、様々な音楽産業、研究活動、福祉等、今日の社会において必要とされている多様な分野で活躍できる人材を育成します。

カリキュラムの構成:

- 1年次は、現代社会における音楽に関わる多様なテーマを概観し、音楽をめぐる社会的な視野を広げることによって、各自が課題意識を持って取り組むための基礎的な力を修得します。
- 2年次以降は、教育、福祉、音楽産業等に関する多様な専門科目を学びます。これらの科目は、それぞれの現場で活躍する高度な専門性を持った教員が担当することにより、社会のニーズに幅広く対応しています。また、少人数制の授業によって、卒業後の進路も見据えたきめ細やかな指導が行われます。
- 全学年を通して、卒業後に社会人として活躍するために有効なキャリア教育科目を充実させています。コンピューターを用いた情報の収集、処理、発信とコミュニケーション能力(プレゼンテーション能力、ディスカッション能力を含む)の開発を重視しています。さらに、各界で活躍する社会人を講師として招聘し、音楽を通して働くことの意義、各職種の具体的内容、キャリアアップや就職の実際について講演を聴く機会が用意されています。
- 実技は、4年間にわたって毎年3種類まで履修することができます。
- 3年次からゼミナールが始まり、文献調査やフィールドワークの手法、プレゼンテーション資料の作成方法等を学びます。その上で各自の研究テーマを設定し、4年次における卒業課題の作成へと結びつけていきます。

●実技専修コース

カリキュラムの目的:

- ・専攻実技について高度な音楽実践能力を身に付けるとともに、音楽教育や音楽文化を中心として幅広い知識を学べるのが特色です。
- ・実技レッスンのみならず、演奏や指導に関わる実践的な授業も用意されており、指導力の育成に力を入れています。
- ・以上のカリキュラムによって、演奏家、指導者として、あるいは音楽産業で活躍する人材の養成を目指します。

カリキュラムの構成:

- ・専攻実技については、週1回の個人レッスンが行われます。その他に、複数の実技を副科として学びます。
- ・授業科目は「応用音楽コース」とほぼ同様ですが、「実技専修コース」は実技科目を中心に据えたカリキュラム展開であるために、科目によって必修と選択の設定が異なります。
- ・3年次からは「実技専修コース」においてもゼミナールが始まります。専攻実技による卒業試験に加えて、選択科目として卒業課題(卒業論文、卒業実習報告書、卒業制作)に取り組むことができます。
- ・卒業演奏試験では、演奏に加えて、演奏プログラム等を提出します。

2. 専門基礎科目

●音楽学関連科目

カリキュラムの目的:

- ・音楽学科目は専門基礎科目の一翼を担うもので、音楽を総合的に学ぶ入り口に位置付けられます。音楽全体についての概観を提示し、音楽を学ぶための基本的な視野を提供することがその目的です。

カリキュラムの構成:

- ・音楽理解の基盤である「西洋音楽史概論」(1、2年必修)を中心に、西洋音楽の各分野について学ぶジャンル史、楽譜や楽曲への基本的な態度を養うための科目群、西洋以外の音楽への耳を拓くための日本音楽や世界音楽に関する科目群など、多面的な音楽研究への道を拓いています。また、音楽学の知識をより深めたいという学生のために「音楽学課程」が設置されています。この課程では少人数のゼミナール形式によるきめの細かい指導を行います。

●ソルフェージュ科目

カリキュラムの目的:

- ・音楽的基礎能力を高め、高度な読譜力を身に付け、楽曲への全体的なアプローチの方法を学習する科目です。音楽を総合的に理解し、把握することにより、表現力を高めることを

目的としています。

カリキュラムの構成:

- ・1、2年次では、グレード別のクラスを編成し、聴音、視唱、リズム課題、読譜課題を中心に授業を行います。他専攻の楽曲の読譜や和声分析、ピアノ以外の楽器聴音、スコアリーディング課題等も取り入れ、様々な時代の記譜法、音楽様式、作曲家の特徴等を総合的に学ぶことを通して、多様な楽曲への興味や関心を高めます。
- ・初級クラスでは授業回数を増やし、確実な学習成果が上がるよう配慮しています。
- ・2年次で上級クラスに進んだ場合には、さらに高度で総合的な読譜能力の修得を目的として、アンサンブルによる初見演奏、現代音楽の分析等も学びます。
- ・3、4年次では、選択科目として多様なクラスを開設しています。
- ・学内外から様々な分野の講師を招聘する特別講座も開講しています。

●音楽理論関連科目

カリキュラムの目的:

- ・西洋音楽の論理性と感性を体得するために、その根底に存在する理論的な構造を学び、作曲家や時代によって異なる音楽様式を理解することを目的としています。

カリキュラムの構成:

- ・バロックから近代までの音楽の基本的要素である「和声」(1、2年必修)を学ぶことが中心となります。
- ・1、2年次では、基本的なカデンツと3和音の理解、属7・属9の和音を始め、古典派で多く使用された機能的な和音進行について学習します。
- ・学生の習熟度によって初級クラス、中級クラスを編成しています。
- ・授業に個人レッスンの形態を含めることによって、学生の理解度を把握し、進度を適宜調整しています。
- ・教科書に沿って課題を実施するのみでなく、編曲法などを逐次取り込み、各専攻実技に活かすことのできる総合的な音楽能力の向上を図っています。
- ・3、4年次では、選択科目として、転調、副属和音、非和声音を含む課題、ソプラノ課題などを学習します。
- ・「和声分析」の授業では、楽曲の和声や音組織の分析を通して「音楽を豊かにしているもの」を理解し、演奏表現へ反映させることを学びます。学生が専攻レッスンで学習中の楽曲も、教材として取り上げています。

3. 専門共通科目

カリキュラムの目的と構成:

- ・専攻別の専門科目に加えて、自由に選択できる専門共通科目を設置しています。専攻を越えて各自の音楽学習をより豊かにするために、「現代音楽の解釈と奏法」「音楽キャリア実習」「オペラ台本研究(声楽専攻のみ専攻科目)」などが開講されています。この中には、

「指揮法」「日本伝統音楽」など中学校、高等学校の教員免許状取得のために必要な科目も含まれています。

4. 基礎教育科目

●外国語科目

カリキュラムの目的:

- ・外国語科目は、基礎教育科目のなかにあつて、とりわけ国際的に活躍できるような教養とコミュニケーション能力を培うこと、また、西洋音楽を幅広く文学・歴史的側面から把握できる素地をつくることを目的としています。

カリキュラムの構成:

- ・英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語(うち最低2言語)は必修外国語として、また、スペイン語、ロシア語、中国語、ラテン語は選択外国語として、それぞれが全専攻を対象に開講されています。
- ・英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語は、初級から上級まで習熟度別クラスを編成しています。
- ・英語はさらに目的別クラスも開設しています。

●教養科目

カリキュラムの目的:

- ・教養科目は、音楽のみならず多様な分野を学ぶことにより、幅広い知識と柔軟な思考に基づいて、物事を適切に判断し、行動する力を身に付けることを目的としています。

カリキュラムの構成:

- ・入学してきた学生が高い意識を持って学生生活に取り組めるように、初年次教育として「東京音楽大学入門講座」(必修)を設置しています。
- ・教養科目として、文化、社会、人間、自然、健康、情報などに関する多様な科目を開講しています。
- ・①コミュニケーション及びプレゼンテーション能力、②多文化理解能力、③情報収集能力、④IT能力、⑤問題発見能力を、在学中に身に付けるべき基本的な能力と捉え、すべての教養科目では、このうちの1つないし2つを授業の柱として設定しています。学生は自分が高めたいと思う能力を考えながら、授業科目を選択することができます。

VII ディプロマ・ポリシー

大学の使命・目的の項で述べたように、アカデミズムと実学の精神を両立させることによって、個の確立、協調性、社会性、国際性を獲得し、広く社会に貢献することのできる人材を世に送り出します。

社会において音楽家として活動するためには、以下の3つの自立を果たすことが必要です。

- ・自ら演奏や作品を組み立てることができる。
- ・自ら音楽における教育の工夫ができる。
- ・自ら音楽活動をする場を作り出すことができる。

これらの自立を実現するためには、以下のことを修得する必要があります。

- A. 様式に則した演奏能力や創作能力を身に付けていること。
- B. 音楽の理論や歴史、体系を理解していること。
- C. 専門領域に留まらない教養を身に付け、演奏家、教育者を始め、様々な音楽分野で活躍できる力を持っていること。
- D. 複数の外国語の基本を身に付けていること。
- E. 社会における音楽の役割について考察し、活動できること。
- F. 上記の学習した事柄を総合して、専攻した音楽の分野を的確に表現できること。

以上の能力を身に付け、所定の単位を取得した者に対して、卒業を認定し、学士の学位を授与します。

各専攻の学位授与の基準事項は次の通りです。

声乐専攻

●声乐

「声」についての専門技術を体系的に修得し、高い音楽性と表現力により各自の特性を活かしたレパートリーを持っていること。多くの人に共感を持って受け入れられる演奏を目指せる者であること。また、他者と共に活動できる協調性や社会性を併せ持つ、人間性豊かな者であること。

●声乐演奏家コース

上記器楽専攻(声乐)の要件に加え、より高度な専門技術と豊かな表現力、音楽性を身に付け、国際的にも活躍できる充実したレパートリーを有していると判断されること。

器楽専攻

●ピアノ

ピアノ音楽の各時代様式に沿った楽曲の理解力、様式感、演奏技術を修得し、古典派、ロマン派、近現代のバランスのとれたレパートリーを形成していること。

将来の音楽活動の基盤として、ピアノ音楽以外にも視野を広げていること。

●ピアノ演奏家コース

演奏家として自立できるための高度なピアノ演奏能力を獲得し、実践的な舞台経験を積んでいること。

各時代様式をカバーするとともに、各人の個性と能力を発揮できる本格的なレパートリーを形成していること。

演奏家となるための広い視野を持った音楽観や人間性を養っていること。

●ピアノ演奏家コース・エクセレンス

演奏家として国際的に活躍できる演奏能力とコミュニケーション能力を有し、協奏曲を含む充実したレパートリーを獲得していること。

●ピアノ・創作コース

器楽専攻(ピアノ)の要件に加え、作曲理論(和声、楽器法等)の基礎を修得し、独奏曲、室内楽などの作曲、編曲を行う創作能力を有すること。

即興演奏や伴奏づけなどの能力も獲得し、社会の音楽的ニーズに柔軟に対応できること。

●コンポーザー＝ピアニストコース

器楽専攻(ピアノ)の要件に加え、作曲理論(和声、対位法、管弦楽法など)を修め、独奏曲、室内楽曲、管弦楽曲などを作曲する能力を有すること。

作曲と演奏を有機的に関連させ、卒業後は幅広い領域で本格的に活動できるように、伴奏や室内楽などの演奏にも経験を積んでいること。

●チェンバロ

後期ルネサンス、バロック時代の作品を出発点として、各時代、各地域のチェンバロという楽器の特性、演奏スタイルの特性を理解し、表現できること。

また、通奏低音を始めとするバロック音楽の基礎理論を修得し、実践できること。

●オルガン

ペダル、レジストレーションを含むオルガン奏法の基礎を修得し、オルガンの構造や歴史についても知識を有していること。バロック時代のオルガン音楽を中心として、ロマン派

や近現代のオルガン作品も体験していること。また、通奏低音を始めとするバロック音楽の基礎理論を修得し、実践できること。

●弦楽器

弦楽器独特の美しく豊かな響きを獲得していること。それぞれの感性と知識によって、楽曲の様式や作曲者の意図を捉え、どのように表現するかを判断できること。アンサンブルの基礎を修得していること。

●管打楽器

高度な技術と豊かな表現力を獲得していること。専門の楽器に関する深い理解とともに、複数の楽器に関する幅広い知識を修得していること。合奏技術に習熟していること。

作曲指揮専攻

●指揮

様々な音楽シーンに必要とされる指揮の高度な技術力と、感性豊かな表現力を修得していること。

楽器や声に関する幅広い知識と、それらの演奏技術に関する基礎的知識を持っていること。

完成度の高い演奏を目指す強い信念を有し、どんな状況の中でも自己を失わず、柔軟かつ冷静に対処できる判断力を持っていること。

創造性に満ちたリーダーとなる努力が続けられること。

●作曲「芸術音楽コース」

現代の作曲家に求められる専門知識と作曲技術を身に付け、独創的な芸術作品が作り出せること。

情報化社会で通用する高度なコミュニケーション能力を携え、コンピューターを始めとする最新のツールを駆使することができること。

創造人として自立できる個性を持ち、音楽やその他の様々な芸術分野で活動できる人材であること。

●作曲「映画・放送音楽コース」

商業音楽の分野で求められる広範囲な作編曲技術を獲得していること。音楽業界を取り巻く時代の変化に対応でき、様々な音楽シーンを作編曲家の立場でプロデュースできる能力を持つ人材であること。

●作曲「ポピュラー・インストゥルメンツコース」

ミュージシャンとして必要な楽器演奏の技術、及び様々な音楽ジャンルの様式感を修得し

ていること。

プロフェッショナルな環境で活動できる自己を確立できていること。

音楽業界を取り巻く時代の変化に的確に対応でき、演奏のみでなく企画制作の面からも音楽をプロデュースできる総合的な能力を持つ人材であること。

●作曲「ソングライティングコース」

様々な音楽の形態に対応できる創作技術を修得していること。

セルフプロデュースのみでなく、第三者に楽曲提供できる能力を備えていること。

音楽ビジネスの仕組みを理解し、高いコミュニケーション能力を持つ人材であること。

音楽教育専攻

●応用音楽教育コース

音楽教育に関する知識と技術を修得していること。音楽と教育に関わる課題に自律的かつ協働的に取り組む能力を修得していること。社会において、音楽と関わる様々な場面で活躍できる応用力を身に付けていること。専門的職業人としての責任感を身に付けていること。

●実技専修コース

各自が専攻する実技について演奏技術を修得し、教育活動に取り組むための技能と表現力を身に付けていること。音楽教育に関する知識と技術を修得していること。音楽に関わる幅広い教養と実践力を有し、専門的職業人としての責任感を身に付けていること。